

民俗博物館だより

Vol.44 No.1

2019. 3. 22



ワークショップ「体験！火をつかう道具」（かまど体験）
撮影：庄司元也氏

目 次

| | |
|-------------------------------|-------|
| 資料紹介 提灯になったクジラー海から山へもたらされたものー | ・・・ 1 |
| 研究ノート 技術の視点から奈良晒を考える | ・・・ 4 |
| みんなく春夏秋冬 平成 30 年度の活動記録 | ・・・ 7 |

〈資料紹介〉

提灯になったクジラ –海から山へもたらされたもの–

茶谷まりえ

(1) はじめに

昨今、捕鯨問題が世界的なテーマになっている。特に、今年には日本がIWC (International Whaling Commission / 国際捕鯨委員会) からの脱退を決定したことで再び社会の注目を集めている。今や、海辺だけの問題ではなくなっているのだ。

「捕鯨は日本の文化だ」という声をよく耳にする。しかし、私たちは日本におけるクジラ文化をどれくらい知っているだろうか。私自身、学生時代に研究を始めるまではクジラとは全くと言って良いほど縁のない生活を送っていた。

本稿では、日本におけるクジラ文化の発展と、「素材」としての利用の展開からクジラが人々の暮らしに与えた影響を考える。また、一見するとクジラとは全く縁の無さそうな奈良に伝わる“クジラにまつわる道具”を紹介したい。

(2) クジラをめぐる文化

クジラには、大きく分けてマッコウクジラを代表とする「歯クジラ」と、ナガスクジラやセミクジラをはじめとする「ヒゲクジラ」の2種類がある。四方を海に囲まれた日本列島には多数のクジラが黒潮に乗って回遊し、その肉は人々の胃袋を満たしてきた。

和歌山県の太地を拠点に組織的な捕鯨、いわゆる「古式捕鯨」がおこなわれるようになったのは江戸時代初期のことである。これは、人力の舟でクジラを湾に追い込み、鋸のりで突いて捕獲するというものだが、漁に出る者だけでなく、肉を捌く・油を絞る・道具や舟を修理する・運搬する者など、実に多くの人々関わる大規模な事業だったのだ。その結果、「クジラ1頭で7浦が潤う」という言い回しが生まれた。

江戸時代を中心に一大捕鯨地として栄えた長崎県の生月島(現・平戸市)で天保3(1832)年に刊行された『勇魚取絵詞いさなとりえことば』という木版刷りの捕鯨図説がある。これには付録として『鯨肉調味方げいにくちょうみほう』という日本最古のクジラ料理専門書が添えられた。その中では、クジラの部位70種類の利用方法が細かく紹介されている。刺身や臓物をはじめとした、鮮度の高い状態の肉が手に入る捕鯨地ならではの調理方法である。加えて、骨であっても部位によっては長時間煮込んだり漬け込ん

だりすることで食用にできることも記されている。しかし、どうしても硬くて食用にできない骨は刻んで鯨油を搾り採り、残り粕は俵に詰めて田畑の肥料として諸国に販売したとある。可能な限りの利活用を図ろうとする、当時の人々の執念を感じる事例である。

鯨油は古くから国内外で灯明油として重宝されてきたが、江戸時代にナタネ油やエゴマ油などの栽培技術が発達して植物性油が普及してからは次第に衰退していくことになる。鯨油の利用の衰退には、植物性のものに比べて臭いが強く、扱いが難しかったことも関係していると考えられる。

しかしながら、鯨油が農業にもたらした影響は大きい。江戸時代の3大農学者の1人である大蔵永常(1768～1861)は、文政9(1826)年に記した『除蝗録じょこうろく』の中でウンカ(稲に害を及ぼす虫全般の総称)駆除の農薬として鯨油を利用することを推奨している。これは、水を張った田んぼに鯨油を撒き、そこに竹の竿を使って稲を揺らして虫を落とし、油膜で動きを封じて気門をふさいだのち、水を抜いて取り去るというものである。古典的な方法ではあるが、絶大な効果を発揮し、

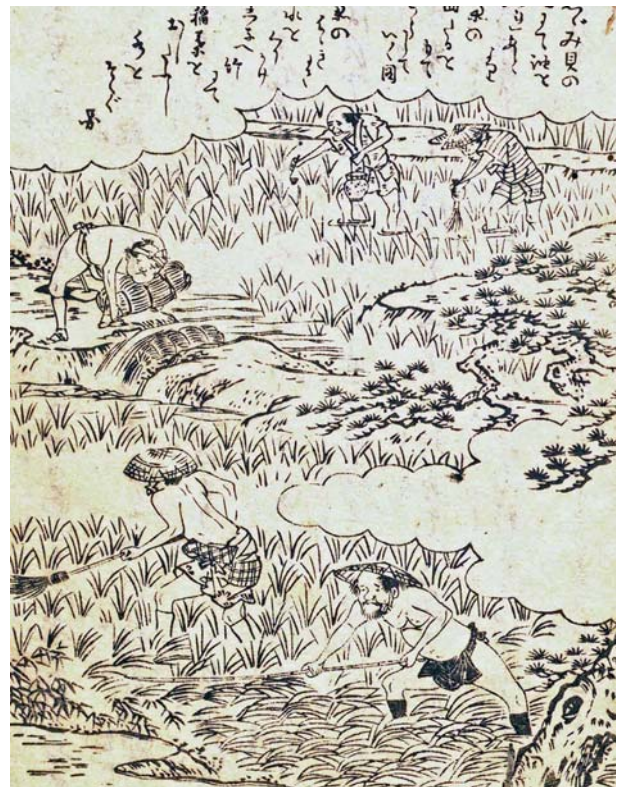


図1. 『除蝗録』

飢饉・虫害による凶作に悩まされていた多くの農民たちを救済した。同書の挿絵には、油水を入れる桶や壺、竹筒、油を振り入れるためのシジミ貝を柄の先に付けたさじ、虫を払い落とすための棒や箒、笹竹などが見られる。(図1)

余談ながら、本草学者の貝原益軒は宝永7(1709)年に刊行された『大和本草』における「海鱈(クジラ)」の項目で、当初は鯨油だけを採取し肉や骨は廃棄していたと記していることも興味深い。加工・運搬技術が発達する前の日本においては、肉よりもむしろ油が重要な資源になっていたことがうかがえる。

(3) 道具になったクジラ

日本の津々浦々を潤してきたのはクジラの肉や油だけではない。それらの副産物であるヒゲや歯は様々な工芸品や日用品に加工されてきた。中でも、美しい黄白色をしており適度な弾力性を持つナガスクジラのヒゲは特に重宝された。西洋では、傘の骨や女性のスカートをつんわりと保つために使われた「パニエ」、ペーパーナイフ、スクリームショー(ヒゲに絵を描いた飾り物)、硬質でツヤのある歯は彫刻や印鑑、服飾品、パイプなどの材料として利用された。一方、日本では江戸時代中頃からヒゲの加工が発達してきた。かんざし、茶托、菓子皿、せせり(火縄銃の掃除道具)、釣り竿、耳かき、まごの手、靴べらなど、ヒゲを用いた日用品は多岐にわたった。

また、文楽人形や茶運び人形といった工芸品のバネやぜんまいにも応用された。『機工図彙』という書物を見てみよう。同書は寛政8(1796)年に刊行された機械技術の啓蒙書だが、その中では3種類の和時計

と9種類の座敷からくり(室内で楽しむ機械仕掛けのおもちゃ)が掲載されている。詳細な構造図・設計図・部品図とともに、材質・寸法・組み立て方を図解しているのが特徴である。特筆すべきは、その中で度々登場する「鯨のひれ」という記述である。「ぜんまいは鯨のひれにて造るべし…」「糸は細きてぐすか、又は鯨のひれを細くするかして…」というように、複数のからくり細工に「鯨のひれ」が使われていた(推奨されていた)ことが見て取れる。「ひれ」というのは恐らく「ひげ」のことであるが、その登場頻度を見てもからくり細工を動かすために欠かすことのできない存在であったことがわかるだろう。

より身近な例を挙げると、クジラのヒゲが大きな役割を担ったのが提灯、特に「馬上提灯」と呼ばれるものである。これは別名を「馬提灯」「馬乗り提灯」とも言い、その名の通り武士が馬に乗る時に使われた提灯である。腰に差すことができるように長い柄が取り付けられており、木製の柄には黒漆が塗られている。柄の先端は鞆状になっており、その中には約20cmの部品が収納されている。この部品こそ、クジラのヒゲなのだ。これは、伸縮させて好みの長さに調節できるようになっており、激しい揺れを伴う馬上で少しでも灯りを安定させるために考え出された“免震装置”の役割を担っていたものと考えられる。クジラのヒゲは他の材質に類を見ない適度な柔軟性と強度を併せ持ち、加工にも適していた。当館に寄贈された馬上提灯にもクジラのヒゲが使用されていることが確認できる。その他、現時点では袴の肩衣(小袖の上に着る袖の無い上着)をピンと張るための骨としてクジラのヒゲが使われていることが確認できている。

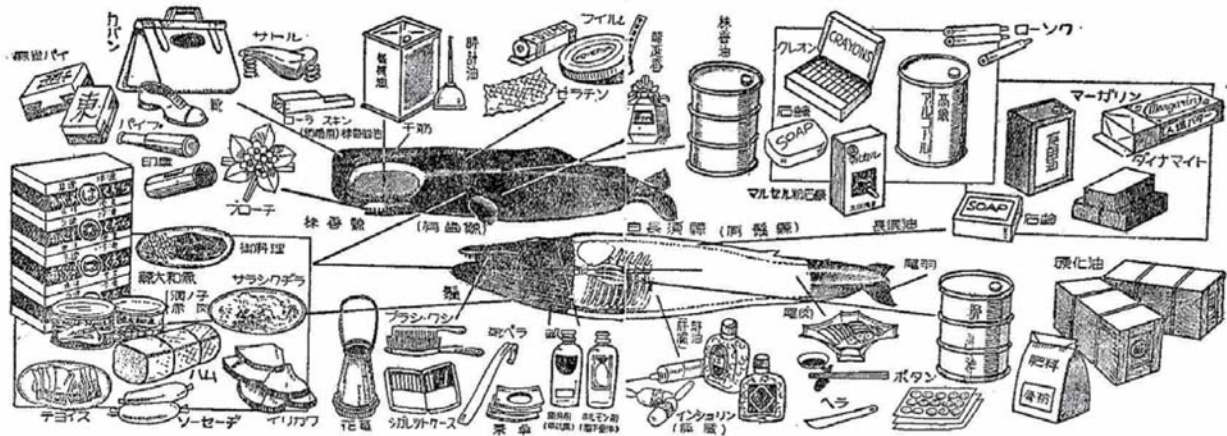


図2.「鯨の利用一覧図」
 (『捕鯨附日本の遠洋漁業』前田敏治郎・寺岡義明/日本捕鯨協会/1952年)



図 3. 馬上提灯 (民俗博物館蔵)



図 4. クジラのヒゲ (筆者蔵)

しかしながら、昭和 20 年代になると、戦時中は軍用品に使われていたプラスチックが一般庶民の間にも広まり、その後の捕鯨規制も重なってクジラのヒゲは身近なものではなくなっていった。その結果なのか、クジラと人の関係は薄くなり、「ヒゲ」と「骨」の混同も多数見られる。馬上提灯を紹介している書籍を見ると、ヒゲが使われている部位を「骨」としている事例も散見する。筆者は骨を使用している事例を未だ見たことがないが、中にはヒゲと骨を混同している例もあると考えられるため、今後の調査の中で確認していく必要がある。

また、軟式テニスのラケット（ガット部分）にもクジラのヒゲが使われたとよく言われるが、実はヒゲ、ましてや骨ではなく「干筋」と呼ばれる脳の腱（骨と筋肉をつなぐ繊維の束）で、洗浄・乾燥させて束ねて縫り合わせたものである。ヒツジやウシの腸を使ったものと併せて高級品とされたが、雨に弱く切れやすいという難点があった。

確かに、「ヒゲ」というと人間のヒゲのように細長くて白い糸のようなものが連想される。しかし、図 4 のように、黒くて硬質でありながら弾力のある板状の部分とその先に伸びる糸状の部分のどちらもヒゲなのである。軟式とは言え、糸状のヒゲにはテニスボールを受け止められるだけの丈夫さや伸縮性は無い。一方、縫り合わせた腱はヒゲに比べると強く、柔軟性も併せ持っていた。しかしながら、クジラのヒゲがプラスチックに取って代わられたように、クジラの腱もまたこの 50 年ほどの間にポリエステルやナイロンといった新しい素材に変化していくことになる。

(4) おわりに

これまで述べてきたように、肉だけにとどまらずクジラの歯やヒゲなどもまた非常に優れた素材として日本人の暮らしを支えてきた。しかしながら、そのことに着目した研究は多くない。ヒゲや骨、歯、腱は「肉以外の部分」として一まとめに捉えられる傾向にある。その結果、道具の発達に与えた影響やその加工技術についてはあまり語られて来なかった。しかし、木や竹ほどは身近でないにもかかわらず“クジラでなければならなかった”理由こそ、道具を作る上でも使う上でも欠かせない役割を担っていた要なのではないかと考える。このことは、今後の私自身の研究や日本のクジラ文化を探る上でも重要な手がかりになり得るだろう。そして、海から山へと伝わっていったものを通して、道具や暮らしの歴史をより深く多角的に知ることができる。

[参考文献]

- ・国立科学博物館『鯨の世界』（国立科学博物館展示解説シリーズ 5,1987）
- ・小島孝夫『クジラと日本人の物語 一沿岸捕鯨再考一』（東京書店, 2009）
- ・埼玉県文化団体連合会『灯火の歴史』（1965）
- ・財団法人日本鯨類研究所『鯨研通信』第 451 号（2011）
- ・谷川健一「農山漁民文化と民俗語」（『日本民俗文化資料集成 16』三一書房, 1995）
- ・東京都江戸東京博物館『あかりの今昔—光と人の江戸東京史—』（1995）
- ・中園成生・安永浩『鯨取り絵物語』（弦書房, 2009）
- ・村上和夫『完訳からくり図彙』（並木書房, 2014）

〈研究ノート〉

技術の視点から奈良晒を考える

横山 浩子

(1) はじめに

近世の奈良晒については、木村博一氏による一連の優れた研究があり、史料から語り得る事実はほぼ尽くされている感があった。しかし近年、繊維や布、紡織技術、紡織用具などからの新たなアプローチにより知見が加えられている。こうした動向を踏まえ、奈良晒の揺籃期を技術の視点から考えてみたい。

(2) 奈良晒の成立時期

奈良晒の名が世にあらわれるようになったのは、16世紀末葉の頃、松永久秀自害（天正5=1577）の後、あるいは羽柴秀長の郡山在城時（天正13～19=1585～91）ともいう。また、この頃帷子の素材として「晒」使用の記録が俄に増加する。『多聞院日記』天文18年（1549）に「白帷布来、マヲ一把半百六十五文、七十文ヲリチン、卅文サラシチン、合二百六十八文入、」天正7年（1579）「宿ヨリ白帷布調来、マオノ代一斗五升、ヲリチン八升、サラシ五升此分自是遣之、」天正13年（1585）「政帷布ヲリ来、・・・サラシニ遣之」など晒発注の記事が、さらに天正19年（1591）の条には「甚四郎般若寺サラシヤへ智入了」とあり、近世奈良晒最大の晒し場となった般若寺に晒屋の存在を確認できる記述がある。

17世紀に入ると慶長11年（1606）には奈良町中から徳川家康への献上がなされ、同16年（1611）には家康から奈良の具足師岩井與左衛門に「南都改」の朱印が与えられるなど、この頃から幕府の御用布として保護奨励を受け、急速に発展する。與左衛門の江戸移住に伴い、同18年（1613）からは般若寺、疋田の晒屋に各役人を定め、仲間の責任において尺幅検査の上、晒布に朱印を押すこととなった。こうした幕藩体制化での生産組織の整備を一つの指標として、慶長・元和の頃を近世奈良晒業の成立の時期としている。

(3) 晒しについて

今日、私達は「麻」といえばまず、木綿とならんで庶民の衣料素材としてイメージするのではないだろうか。しかし17世紀、この概念とは全く異なる布があっ

た。奈良晒である。「さらし布」といえば即ち奈良晒を指し、^{どんす}緞子・^{しゆす}縹子、^{ちりめん}縮緬、^{さや}紗綾、^{りんず}綸子、^{はぶたえ}羽二重などの当時最先端の高級絹織物と並び、支配階層の人々が着用する「呉服物」として扱われている。その名から推して、特に晒法に独自性と質の高さが認められていたのだろう。

麻類の布に晒しを行うこと自体は、古来一般に行われてきた。目的の一つは漂白で、麻の繊維が元来持つ色素を除去するためであるが、今一つは、これを行うことによって繊維から^{きようざつぶつ}夾雑物を除き、繊維をほぐしてやわらぎを与え、身に添った着心地のよい布にする作用（精練）がある。

晒し工程は、織布の仕上げ工程にあたるが、「染色」を前提として考えた場合、麻繊維自身のもつ色を除去するとともに発色や定着の阻害要因となる物質を取り除く重要な前処理工程でもある。また、生地の純白は染め色に冴えをもたらずと同時に、白という色そのものとして重要であった。染料に白という色はないからである。平織りの麻布の加飾法として染色は重要で、その発達で麻布の高級化を促した。また逆に、染織素材としての布の品質向上が、より高度な技術を触発する。17世紀には、後に「誠瀬戸物の南京の本渡りをみるごとく」とも喩えられる（『^{ばんきんすぎわいぶくろ}萬金産業囊』享保17年=1732）「茶屋辻」が登場する。

「潔白雪の如し」（『和漢三才図会』正徳2年=1712）と賞されるに至った晒し技法の概要については、『呉服類名物目録』（寛延元年=1748）、『^{ならあさらしふこんりげんしゅう}奈良瀑布古今俚諺集』（延享元年=1748、以下『俚諺集』と略す）、『南都布さらし乃記』（寛政元年=1789）などから18世紀の当時の概要を窺うことができる。

糊抜き、元付（元入）、釜入れを行い、その間草原に干しては1日5、6回から7、8回もムラなく希釈した灰汁を打つ（かける）こと、また布搗きと云って清水に布を浸しつつ白で搗くことなどを何度も繰り返し、最後に仕上げ干しとして地を調え張干しを行う。人手と大がかりな設備、複雑な工程を伴うこうした技術は、段階を踏んでその精度を増していったと思われるが、その発達過程を跡づける史料はない。

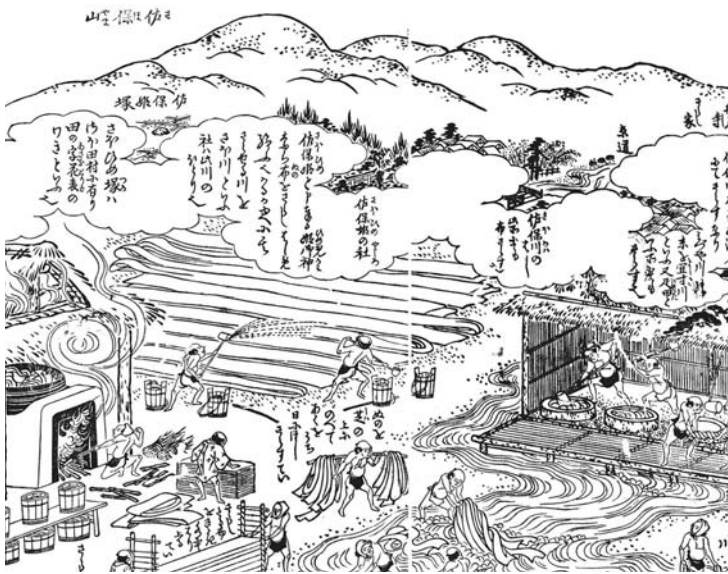


図1.『南都布さらし乃記』(前田家文書)寛政元年(1789)

後の奈良晒に繋がる諸技術を育んだ中世奈良の町は、寺社勢力の膝下であり、既に京都に次いで衣料生産が盛んな都市であった。応永14年(1407)、大乘院支配下にあった南市には、苧座、綿座、絹座、布座、小袖座、小物座、布ヒサメ座など多くの衣料関連の座が成立しており、その染色需要に応える紺屋も多数存在した。紺座は、年に20貫文もの公事銭を収め、市座30のうち第2位の額を占めるものであったという(『三箇院家抄』)。具体的な染料として紫や紅がみえるのは16世紀後半だが『多聞院日記』には染帷子、染賃の記載も多い。上品の染色には高度な精練技術が伴い、絹織物の灰汁練りなど、素材は異なるが奈良晒の晒法と近接する技術である。

近世の奈良の晒法の特徴としては、一回に大量の布(一釜60疋という)を扱い、いかにムラなく商品に仕上げるかという大量生産技術である点も見逃せない。

先には挙げなかったが、晒布が登場する記事として『大乘院寺社雑事記』明応8年(1499)4月8日条「興舜寺主青侍入道源光、在所先日入小恣(盗)人、釜内之サラシ布数十反取之、方々挑方可如何哉之由、衆中辺披露、種々及評定、所詮挑手共令同道可集会所、可有皓文旨一決了、ヌリコメニ置分之布ハ無相違之間、主方ニ可渡之云々、彼源光八十四五老者也、一段不便之間、可及此成敗歟、」がある。このことは永島福太郎氏や安田次郎氏などによって既に紹介されている。

永島氏は、『奈良市史通史編2』「奈良の産業」の項でこの記事を挙げ、源光を「晒屋」とみて、ここに後の奈良晒業の萌芽をみている。

一方、安田氏は、盗まれたサラシ布は「客から預け

られ、源光が染めあげるようになっていた釜(藍がめ)の中の布」とし、源光を紺屋としている。釜を藍甕とし、盗まれたのが染色途中の布とするのは難しいように思うので、ここは布の精練作業が行われていたとみたい。

ともあれ15世紀既に寺中ながら多数の発注者から注文を受け、布を預かり、大量の処理作業を行っていた様子が窺え、数十反の布となれば相応の設備も想定される。こうした姿がやがて近世の晒作業(図1)にも繋がっていくのではないだろうか。

(4) 紡織工程と南都の「布機」

奈良晒の品質は、晒工程のみで決まるものではない。

原料は、隔地羽州産の苧麻ちよまが用いられている。

また、紡織上の特徴でいえば、緯糸に撚りをかけない「平布」を挙げることができる。平布は、中世の史料にもその名がみえるが、南都では、元来経緯ともに撚りをかけた「樓布たてよこ」ばかりだったものが慶長年間以降にはじめて平布が織り出されたといい、17世紀末頃には、晒布といえ多くが平布になっていた(『俚諺集』)。特に「御召晒」と称される最上級品は、殆ど経糸も撚りをかけていない。平布であることが、奈良晒に独自の布の地合、風合いを生み、さらに染料の浸透をよくし、「染めて色よく」の一助ともなった。

製織用具にも特徴がみられるが、紙幅に限られるのでここでは織機についてのみ述べる。この機は近年、「大和機」として染織技術史の研究者の間で注目されているものでもある。

布巻を機台に固定させ、轆轤仕掛け二枚綜統そうこうを踏木ふみぎに連結し、これを交互に踏むことによって開口する「高機」である(図2)。

『俚諺集』は、この機を以て南都布が一般の「田舎布」「外国布」とは一線を画すものとする。同書に先立つ『和漢三才図会』、卷第36「女工具」の項は、木綿機に上機かみはた、下機しもはた二形式があるとし、当時木綿、麻の織布は一般に「下機(地機、今日いわれる天秤腰機)」で行われていたのに対し「・・・上機は和州で多く用いられ、麻や紬を織る」との注釈を入れている。17世紀後半から18世紀初期には大和国内に普及し、京・大坂など周辺地域から広く認知されていたことがわかる。

『俚諺集』ではまた、皇都の絹布用の高機を模して作る、という。京都での絹用二枚機の使用は『呉服類名物目録』にも窺え、『西陣天狗筆記』「高機・平機差別

之訳」の項は、西陣では花樓装置を備えた紋織り用の機を「高機」とするが、元来絹織機は平機で高機といふ名は、紋織物が出来て以後のこととする。また、絹織物用に「平機」、「二枚機」、「西機」などと称する機があり、当時平織の類を主とする織屋もあったことを記している。時代が下るが大関増業『機織彙編』二之巻(文政12=1829年)に別製「絹機」とする機の図がある。使用場所等が不明ではあるが、形態的に南都の布機と同系列である点で各研究者とも一致している。

導入時期は「慶長年中より縷平布盛んになりし故、機細工巧業の家職出来て、三四宇今に至りて所所に居住す」とあり、奈良晒布の急速な需要の伸びに対応し、作業の効率化を図ったものと考えられる。

高機への転換は、経糸の張力調整から作業者の身体を自由にし、併せて腰掛け位置が高く踏木を使用することにより作業姿勢が改善される。また箴おさは打込み具おさ、杼ひは緯通し具に機能分化しているため、重複動作が省かれるなど、作業効率、労働生産性を向上させる利点があり、天秤腰機の3倍ともいわれる。しかし、それは、600～800m以上ともいう長繊維で強靱、さらに精練によって柔軟性を増した絹糸の場合であって、弾性、伸縮性が小さく柔軟性に欠ける1m前後の繊維を撚り繋いで糸とする苧麻布では、布巻が固定され経糸張力の自在な調整が難しく、却って作業効率は低下する。

しかし、植村和代氏は、自らの実験の結果から、傾斜型の高機(大和機)には、開口時に上糸と下糸の経糸張力が異なることによって天秤腰機と類似する経糸張力の微調整機能を発揮することを明らかにした。独特のフォルムには、高機の利点を生かして作業効率の向上を図りつつ、経糸にかかる負担を極力軽減することができる、「麻糸を織る高機」としての合理的な意味があるとしている。

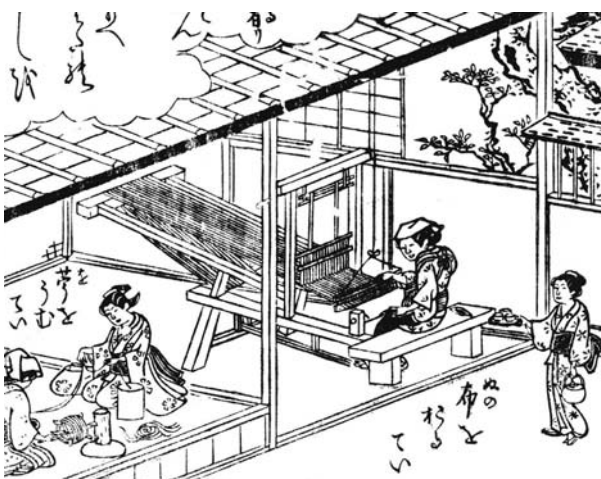


図2.『南都布さらし乃記』(「布をおるてい」の部分)

(5) 結びにかえて

16世紀後半～17世紀、奈良晒が台頭した時代は、明の工人の渡来や染織品の輸入など、中国からもたらされた技術や製品が、我が国の染織品の種類や技法の飛躍的發展を促した時期にあたる。京都や堺で様々な新規の織物が織り出されるようになり、特に京都はその後も他の追随を許さず長く織物業の中心的地位を保っている。京都、堺と人や物の盛んな交流をもつ奈良でも、そうした潮流の中で、いわば「絹織物における西陣のように」晒布で独占的地位を築いた。奈良晒の製織や晒しの中には、それまで殆ど行われていなかった新しい技術の開発、導入の痕跡が垣間見える。

植村氏は、大和機の来歴に触れ、機構上の特色から西アジア由来とし、16世紀から17世紀初頃の日本の海外交易等の動向などを考えあわせ論じている。

佐貫尹・佐貫美奈子両氏もまた、各地の高機の変遷についての調査・研究から、この機に注目する研究者である。その結実である『高機物語』で、京都の五条坊門通菅大臣神社附近で織られていた茶宇嶋・木綿嶋、一貫町通あたりの木綿嶋など輸入綿製品の模織布に用いられたという小型の高機ではないかと推定する。

さらに、広岩邦彦氏は、当時明国苧麻布が大量輸入されていた実態から、その品質に刺激され、奈良がこれを真似ようとしたことが晒しや織布の品質改善の契機になったとの論を展開している。

これらの説について、実証という点から現時点でこれ以上踏み込むことが難しいが、古来日常に遍在してきたと思われる麻の紡織技術ながら、時代の要請により、外来技術の摂取、織機など先進用具やその情報が移入された可能性は否定できない。

[参考文献]

- ・木村博一『近世大和地方史研究』(和泉書院, 2000)
- ・澤田和人「帷子の基礎的研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告 125 集』, 2006)
- ・『奈良市史 通史編 2』(奈良市, 1994)
- ・安田次郎『奈良の中世—都市民と寺院の支配—』(吉川弘文館, 1998)
- ・植村和代『織物(もの)と人間の文化史 169』法政大学出版会, 2014)
- ・永島福太郎『中世畿内における都市の発達』(思文閣出版, 2004)
- ・貫秀高『日本近世染織業発達史の研究』(思文閣出版, 1994)
- ・佐貫尹・佐貫美奈子『高機物語』(芸艸堂, 2002年)
- ・広岩邦彦『「唐布」から「奈良晒」へ—17世紀の輸入代替—』(『服飾美学』第64号, 2018)

みんなく春夏秋冬

平成 30 年度の活動報告

【展示】

1. 企画展

- ・ 4月28日(土)～6月30日(土)

春季企画展「不思議な形 不思議な名前」

不思議な形や名前を持つ道具には、何らかの意味や由来がある。異なる名前を持ちながらも同じ用途のもの、同じ名前を持ちながらも異なる用途のものなど、じっくり見比べることで道具の生き活きとした魅力を見つけることができる。「角」「脚」「穴」のある道具、「らんびき」「とんび」「べんけい」など不思議な名前を持つ道具約50点を展示。(3,123名)

- ・ 7月14日(土)～9月2日(日)

夏季企画展 明治150年記念

「ものづくりの発想－民俗資料からみる特許・実用新案制度－」

当館が所蔵する民俗資料の中から「特許」「実用新案」の番号を持つものを取り上げ、それらがどのようなアイデアで何を改善する目的で生み出されたものなのかを見ていくことで、技術の変遷や当時の時代背景に追った。(1,642名)

- ・ 10月6日(土)～12月16日(日)

明治150年記念特別展

「くらしから読み解く明治150年」

歴史の一大転換点である明治維新は、人々のくらしや意識にどのような変化をもたらしたのか。灯火用具や通信用具、はたおり機や養蚕用具など郷土の近代を支えた生産・生活用具を展示紹介。(5,343名)

- ・ 2月23日(土)～3月24日(日)

季節展「ひなまつり－人形たちの宴^{うたげ}－」

所蔵品の雛人形を一堂に公開する当館恒例の展示。御所の菓種商に伝えられた幅3.6m、3段にわたる大型の御殿飾り雛人形をはじめ、県民の方々からの寄贈を受けた幕末から昭和50年代の雛人形、雛の調度、市松人形、ままごと道具、一刀彫り奈良人形ほか郷土玩具など、総点数100点を紹介。

2. コーナー展

- ・ 3月17日(土)～4月22日(日)

「旅と行楽」

春の行楽シーズンに合わせ、大正時代から昭和期のお弁当箱や衣装、小物などの“旅”や“行楽”にまつわる資料約30点を展示。

- ・ 5月3日(木・祝)～6月24日(日)

「臯月(さつき)」

端午の節供に合わせ、五月人形や田植えの季節にまつわる道具を紹介。

- ・ 7月1日(日)～7月29日(日)

「夏のくらしと涼む道具」

うちわや扇風機など、暑い夏を涼しく過ごすための道具を展示。明治150年の節目の年にあたり、明治時代から庶民に広まったかき氷にスポットをあて、氷に関する道具もあわせて紹介した。

- ・ 8月4日(土)～9月2日(日)

「戦時下のくらし」

8月の恒例展。兵士の衣服や手回り品、配給の切符や千人針など、日中戦争～昭和20年代後半期の戦時体制下の生活資料を展示。

- ・ 9月22日(土)～1月27日(日)

昔のくらし関連展「子どものくらし－あそびとまなび－」

昭和20年代の教科書や勉強道具、おもちゃを中心に紹介。秋の遠足・校外学習で博物館を訪れるたくさんのお子もたちと一緒に“ちょっぴり昔”の子どもくらしについて考えた。

- ・ 12月8日(土)～2月24日(日)

「冬のくらしとあたたまる道具」

湯たんぼやコタツといった昔なつかしい暖房器具をはじめ、ちょっぴりオシャレ心のある日用品、手づくりされたワラ製の道具、冬のくらしをとらえた写真など“目からあたたまる”品々を紹介。

- ・ 3月16日(土)～4月21日(日)

「桶と籠」

同じように見えるものでも、使われる目的や場面によって大きさも材質も使い方も全く異なる桶と籠の奥深さと魅力に迫るミニ展示。

3. 民家集落の展示

- 2月16日(土)～3月3日(日)
「古民家でひなまつり&竹のあんどん展」
場所：旧白井家住宅・旧鹿沼家住宅
協力：谷口武氏、矢田の里たけのこクラブ
江戸時代の町屋・旧白井家住宅に8段の雛人形を飾る季節の恒例行事。10周年を記念して、旧鹿沼家住宅で谷口氏作の竹のあんどん展も同時開催。
- 2月16日(土)、17日(日)
「旧萩原家住宅茅葺き屋根葺替現地見学会」パネル展示
場所：旧萩原家住宅前

4. 玄関ホール展

- 5月26日(土)～6月24日(日)
「有形民俗資料の保存修復」
平成29年に締結した京都造形芸術大学との連携協定の成果を展示公開。有形民俗資料の保存・修復・活用について学ぶ学生たちが、当館の所蔵資料を教材として1年かけて行った修復作業の過程と成果を発表。写真パネルとあわせて、実際に修復された実物資料を展示。
- 7月14日(土)～9月30日(日)
写真展「奈良の野鳥たちー矢田丘陵の野鳥ー」
協力：日本野鳥の会 奈良支部
大和民俗公園を含む矢田丘陵で見られる野鳥を、約30点の写真パネルと生態調査の記録から紹介。野鳥を通して矢田丘陵の自然にふれた。
- 10月27日(土)～12月16日(日)
写真展「私にとらえた大和の民俗ー火ー」
共催：奈良民俗写真の会
8名の写真家が奈良の民俗行事・風景を写真作品にする競作展の8回目。毎年テーマを設定してそれぞれの視点でとらえた作品を展示。各自「火」にまつわるテーマで3点を出品。計27点
「野の煙」(吉崎喜寿)、「消火」(森川壽美三)、「フクマル」(田中真人)、「遠慮のトンド」(田中真人)、「浄火」(脇坂実希)、「古い」(野口文男)、「信心(やすらぎ)」(森川光章)、「献灯」(松本純一)、「めぐみ」(志岐利恵子)

【催し物】

1. 講演会
 - 5月19日(土)
「国際博物館の日」記念講演会
「世界の暦、日本の暦ー民俗と民族のこころを問うー」
講師：国立民族学博物館名誉教授/吹田市立博物館館長
中牧 弘允 氏
『カレンダーから世界を見る』(白水社)、『ひろちか先生に学ぶこよみの学校』(つくばね舎)、『世界をよみとく「暦」の不思議』(イースト新書Q)等の著者が世界各地のカレンダーや暦の歴史とその魅力を紹介。(30名)
 - 11月11日(日)
明治150年記念講演会
「明治維新と奈良の祭りーおん祭・村落祭祀の近代ー」
講師：天理大学文学部教授 幡鎌 一弘 氏
明治維新のなかでおこなわれた神仏分離や神道国強化、あるいは文明開化など多くの政策は、寺院や神社の姿だけではなく、人々の生活や意識を大きく変えた。150年前に何が変わり、何が変わらなかったのかを、春日若宮おん祭や村落の実態から辿る。多数の事例をもとに、講演いただいた。(45名)
2. ワークショップ・体験学習
 - 5月3日(木・祝)～5月5日(土・祝)
「子どもの日ワークショップまつり」
協力：矢田の里たけのこクラブ/紙芝居工房・適(あっぱれ)/Good Job!センター香芝/たんぽぽの家アートセンター HANA
端午の節供にちなみ、竹の工作(鯉のぼり・風車・万華鏡・ブローチ)、鯉のぼり木製クリップ、レトロ紙芝居&型抜き体験、季節のトートバッグ、クイズ&スタンプラリーなど大人も子どもも楽しく参加できる工作・体験プログラムを開催。(462名)
 - 6月23日(土)、6月24日(日)
「さわってみよう、つくってみよう、不思議な形ープラスチック板で作る昔の道具ブローチー」
春季企画展にあわせ、不思議な形の道具をモチーフにしたブローチ作り。学芸員と共に展示室の道具を観察しながら工作を楽しむプログラム。(40名)

- ・7月28日(土)、7月29日(日)
「夏のくらし体験&ミニ植木鉢の風鈴づくり」
3年目となる風鈴づくりのプログラムに加え、コーナー展に関連し、昭和期のかき氷機を使って氷を削ってみるミニワークショップを同時開催。(97名)
- ・8月4日(土)
「戦争と平和のおはなし会&ミニ折り鶴工作」
協力：朗読の会 陽だまり
戦争を語り継ぎ、平和の意味を問う朗読会。小さな折り鶴で小物を作るワークショップも開催。(19名)
- ・8月5日(日)
「竹のからくりおもちゃ教室」
協力：矢田の里たけのこクラブ
2羽のウサギがピョコピョコと餅つきをする「ウサギの餅つき」、紐があちらこちらから出たり入ったりする「からくりヒモ」の2種類を製作。「競技用竹とんぼ」の体験も開催。(52名)
- ・8月11日(土・祝)
「いろんなもので染めてみよう
ー身近なもので染めて作る夏小物ー」
絵の具を使った折り染めのうちわと、ツツジの花びら染めの布コースターを製作。(51名)
- ・8月26日(日)
「昔の道具研究室ー集まれ！キッズ学芸員ー」
共催：奈良工業高等専門学校
講師：機械工学科教授 廣 和樹 氏
「有明行灯」のデザインに着目した発泡スチロール製の模型や江戸時代の書物に登場するからくり人形をモデルにした「連理返り人形」の工作に挑戦。奈良高専の廣教授による物理の仕組みについてのレクチャーや学芸員による企画展解説も行った。(33名)
- ・10月14日(日)
「つくろう！あそぼう！昔のおもちゃ」
協力：紙芝居工房・適(あっぱれ)
矢田の里たけのこクラブ
手作りして、遊んで、昔のおもちゃを楽しむ企画。カプセルとビー玉、紙粘土を使った「起き上がりこぼし」、ゴムで飛ばす竹と厚紙の飛行機を製作。レトロ紙芝居も同時開催。(35名)
- ・10月20日(土)
昔のくらし体験①「昔のあかり&秋の夜のおはなし会」
協力：朗読の会 陽だまり
旧白井家住宅を会場に、和蠟燭や灯明などの昔の灯りの中で3つの物語の朗読を楽しんだ。(24名)
- ・12月9日(日)
「写真家座談会ー火に関する奈良の民俗ー」
共催：奈良民俗写真の会
場所：旧白井家住宅
玄関ホール写真展の関連イベント。写真展の作品を紹介しながら、野焼きやトンドなど「火」に関する奈良の民俗について語った。(25名)
- ・12月23日(日・祝)
「里山のお正月かざり」
藁を束ねて結んだ輪に、園内等で採取した木の実、小枝、綿やフェルトなどを飾りつけてオリジナルのお正月かざりを製作。わら打ち体験も。(24名)
- ・12月24日(月・祝)
昔のくらし体験②掃除「古民家の大掃除」
場所：旧白井家住宅・旧鹿沼家住宅
民家で昔の人たちの知恵と工夫を体験。色とりどりの可愛い布を使った「はたき」や藁製の「釜炭おとし」などの小さな掃除道具作りも。(9名)
- ・1月5日(土)、1月6日(日)
「新春お正月あそび&体験！火を使う道具」
協力：矢田の里たけのこクラブ
場所：旧白井家住宅
民家で、“ちょっと昔”のお正月を楽しむワークショップ。昭和レトロなおもちゃの貸出しの他、ビニールとストローを使った凧の手作り教室も開催。「あたたまる道具」展に合わせ、火に関する昔の道具の紹介・実演、かまどの火入れ体験も。(278名)
- ・1月14日(月・祝)
昔のくらし体験③炭火アイロン「炭火アイロン体験&アイロンビーズでコマ作り」
「炭火アイロン」の体験、現代のアイロンとカラフルなアイロンビーズを使ったコマの製作を楽しむプログラム。(34名)

- ・2月16日(土)、2月17日(日)
「春の子どもワークショップまつり」
協力：紙芝居工房・^{あつぼれ}適/ならくみひも^{ほうみ}鳳美/むろう
はちみつ/矢田の里たけのこクラブ
毛糸の^{くみひも}組紐ストラップ、みつろうキャンドル、竹のくるくるシャトル、フェルトの季節かざり、レトロ紙芝居&あめ引き、かまどカフェ、古民家クイズ&スタンプラリー、旧萩原家たんけんツアーを開催。(266名)
- ・3月3日(日)
「早春おはなし会—おひなさまの前で—」
協力：朗読の会 陽だまり
「古民家でひなまつり&竹のあんどん展」関連行事。
旧白井家住宅の雛人形の前で、かまどの火で暖まりながら季節の物語を楽しむ朗読会。(50名)
- ・3月23日(土)
昔のくらし体験④「かまどご飯でおむすびを作ろう！」
江戸時代の民家で、かまどを使ってご飯を炊くワークショップ。米とぎから火起こし、おむすび作りまでを参加者に体験できる人気プログラム。(11名を予定)

【連続講座】

「大和機で麻布を織る」(1～3期生)
期間：平成30年4月～平成31年3月(月2回)
指導：澤田 絹子 氏
江戸時代、奈良晒の原料として用いられた苧麻(カラムシ)の繊維を用い、当時と同タイプの紡績用具で布作りに挑戦。苧麻の繊維の取り出しや糸作り、大和機に糸をかけて織るまでを体験。今年からは機織りの基礎を学ぶ腰機体験をプラス。

【機織りの実演】

協力：澤田 絹子氏
平成24年秋から実施。機織りと関連作業を見学できる。説明や質問も随時受け付け。(10回実施)

【学校・博物館等との連携・協力】

1. 大学との連携(連携協力に関する協定締結)
- (1) 継続(平成23年度協定締結)
帝塚山大学大学院 人文科学研究科日本伝統文化

専攻後期博士課程在籍者のインターンシップ受け入れ。(平成30年度については希望者なし)

(2) 継続(平成29年度協定締結)

京都造形芸術大学との有形民俗資料の保存・継承、活用に関する教育研究活動についての相互協力。館蔵資料を修復の実習資料として貸出。実習内容と成果を当館玄関ロビーで展示した。

(3) 教員向け地域資料研修会の開催

共催：奈良県図書館協会 地域資料研究会
当館のワークシートを教員自ら体験し、更にアレンジを加えてオリジナルの教材を作成することで、子どもたちの目線に立った教育プログラムづくりと博物館の楽しみ方を考えるワークショップ形式の研修。様々な授業での博物館の活用方法を提案するとともに、現場の先生たちと意見交換を行うことで、地域資料へのより深い理解と広い活用につなげるねらいとした。(11名)

2. 展示解説・出張授業等

(1) 小中学校等の団体見学 72校

- ※学芸員による展示解説 66校
- ※古民家・かまど解説 53校

(2) 臨地講義・講師派遣等(高等学校、大学、一般)

- ・4月18日(水) 臨地講義
奈良県立西の京高等学校 地域創生コース(44名)
- ・6月1日(金) 臨地講義
奈良県立法隆寺国際高等学校(40名)
- ・5月13日(日)・6月10日(日) 臨地講義(博物館実習) 奈良大学 通信教育部(80名)
- ・7月24日(火) 講師派遣
大東市立歴史とスポーツふれあいセンター(20名)
- ・8月28日(火) 講師派遣
大東市立歴史とスポーツふれあいセンター(15名)
- ・11月7日(水) 臨地講義
生駒市適応指導教室 小中学生(11名)
- ・11月17日(土) 講師派遣
大東市東諸福公民館(44名)
- ・1月24日(木) 講師派遣
広陵町立真美ヶ丘第一小学校(72名)
※象印マホービン(株)との協働授業

- ・2月23日(土) 講師派遣
生駒ふるさとミュージアム(12名)

3. 博物館実習・インターンシップ

- ・8月22日(水)～8月26日(日)
京都学園大学(1名) 博物館実習
- ・7月26日(木)～7月27日(金)
奈良県立青翔中学校(2名) 職場体験学習
- ・11月7日(水)～11月9日(金)
奈良市立富雄南中学校(3名) 職場体験学習
- ・12月11日(火)～12月16日(日)
奈良大学/八洲学園大学(1名) 博物館実習

4. 有形民俗資料、無形民俗資料記録資料の貸出 (平成31年1月末現在)

- ・洗面桶他計9点〔教材〕京都造形芸術大学
- ・国民服他計7点、(写真含む)〔教材〕
大和郡山市立郡山西小学校
- ・国民服他(複製物、写真含む)6点〔教材〕
片桐西小学校
- ・DVD資料「大和の民俗 生産・生業I」1点〔勉強会〕
国営飛鳥歴史公園事務所平城分室
- ・DVD資料「奈良のむかし話シリーズ60～68」9点
〔夏休みイベント〕平城宮いざない館
- ・映像資料「大和の伝承記録映像-②-」1点〔研究〕
京都造形芸術大学
- ・糸車2点、綿くり器2点(体験用)〔教材〕
生駒市立桜ヶ丘小学校
- ・糸車1点(体験用)〔教材〕
大和郡山市立矢田小学校
- ・映像資料「履物表つくり～チバ表～」1点、「大和の
伝承記録映像-①-」1点〔教材〕
桜井市立大福小学校
- ・糸車1点、綿くり器1点(体験用)〔教材〕
奈良学園小学校
- ・ホーロー看板他15点〔町家物語館1周年記念事業〕
大和郡山市 地域振興課
- ・糸車1点、綿くり器1点(体験用)〔教材〕
奈良学園小学校

5. 資料の特別閲覧・写真撮影、画像資料提供など (平成31年1月末現在)

- ・収蔵庫内木綿関係資料〔特別閲覧〕個人(調査)
- ・展示品及び収蔵庫内資料〔特別閲覧〕*連携協力

- 京都造形芸術大学(実習)
- ・奈良さらし用の杼2点〔特別閲覧〕竹山舎(研究)
- ・井戸つるべ1点〔画像提供〕近鉄ケーブルネットワ
ーク(株)(番組制作)
- ・大和かすり、大和木綿資料計30点〔特別閲覧〕
(株)ジェイワークス(NHK奈良制作番組「岡本教授
の大和まだある記」)
- ・大和木綿資料一式計30点〔特別閲覧〕個人(研究)
- ・川舟、踏車〔特別閲覧〕大東市教育委員会 生涯学
習課(資料調査)
- ・横槌32点〔特別閲覧〕立命館大学 文学部考古学・
文化遺産専攻4回生(卒論研究)
- ・稲扱4点〔特別閲覧〕個人(研究)
- ・蚊帳、火鉢、和ろうそく等 計5点〔画像提供〕
個人(出版掲載「住まいの民俗事典」)
- ・井戸つるべ1点〔特別閲覧〕近鉄ケーブルネットワ
ーク(株)(制作番組「奈良イチ研究所」)
- ・博物館だより96号、98号、105号〔資料提供〕
奈良県立畝傍高等学校家庭クラブ(研究)
- ・和国廣瀬社絵図面1点〔写真転載〕個人(出版掲載)
「遷都と国土経営-古代から近代にいたる国土史-」
- ・五月人形(神功皇后)画像1点〔画像提供〕生駒ふ
るさとミュージアム(秋季特別展展示及び解説リー
フレットへの掲載)
- ・近世麻布研究所寄託奈良晒関係資料一式〔特別閲覧〕
(株)ジェイワークス(NHK奈良制作番組「岡本教
授の大和まだある記」)
- ・「南都布さらし乃記」①紡績1点②晒し1点、奈良晒
布朱印部分1点〔画像提供〕(株)ジェイワークス(NHK
奈良制作番組「岡本教授の大和まだある記」)
- ・手織機1点〔画像提供〕個人(出版掲載「日本の高機」)
- ・館の外観、稲作の開墾・耕作用具、常設展「大和の
お茶」コーナー、移築民家、林業・山仕事の道具類
計5点〔画像提供〕(株)雄山閣(出版掲載「奈良の
ミュージアム」)
- ・出雲人形12点〔特別閲覧〕NHK(取材資料)

*展示の予備調査等は除いています。

奈良県立民俗博物館だより Vol.44 No.1 (通巻 110号)
2019(平成31)年3月22日発行
編集発行 奈良県立民俗博物館
〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地
Tel0743-53-3171 / Fax0743-53-3173
印刷 株式会社アイプリコム
〒636-0246 磯城郡田原本町千代360-1
Tel0744-34-3030 / Fax0744-34-3040